

乾隆帝と趙翼の長篇五言古詩：白居易「遊悟真寺詩 一百三十韻」の再評価をめぐって

汪， 洋
九州大学大学院人文科学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7183049>

出版情報：中国文学論集. 52, pp.107-124, 2023-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



乾隆帝と趙翼の長篇五言古詩

——白居易「遊悟真寺詩一百三十韻」の再評価をめぐって——

汪 洋

「遊悟真寺詩一百三十韻」（以下「悟真寺詩」と略称す）は、『白居易詩集』卷六「閑適二」に所収、元和九年（八一四）の秋、作者の藍田王順山悟真寺での五晝夜の参拝を主題とした五言古詩である。百三十韻を踏んだこの作品は、杜甫「北征」、韓愈「南山詩」に匹敵し、中国古典詩歌史上屈指の大長篇である。一方、傑作と評されているこの詩は、実には宋代以降、長い間に文学史の表に浮上することがない。詩の作った元和九年から約千年を隔て、清の乾隆嘉慶期に乾隆帝（一七三六―一七九六在位）勅撰『御選唐宋詩醇』（乾隆十六年「一七五二」初刊³）や趙翼（一七二七―一八一四）『甌北詩話』（嘉慶七年「一八〇二」初刊⁴）の表彰を得た。これは現在「悟真寺詩」への評価の原点に当たる⁵。

さて、なぜ長く埋もれていた「悟真寺詩」は、乾隆嘉慶期に入って詩壇の脚光を浴びようになったのか。この点について、白居易の受容史の分野で、一定の検討が蓄積してきた⁶。それは、乾隆帝の白居易推奨をきっかけにして、白居易詩歌への評価が高騰し、次いで「悟真寺詩」も再評価されたという見解に要約できる。ただし、白居易の再評価と「悟真寺詩」の再評価とは、あくまでも相違ある二つのことである。白居易への評価の高点として、北宋初期の「白体」と明末公安派の「白蘇」を貴ぶ詩風との流行が一般に知られている。この二つ時期には、「悟真寺詩」は依然として人の読むことありはしない作品である。古典時代において、作品への好評は、概してそれへの擬作に伴って発生していた。その為、乾隆帝と趙翼の「悟真寺詩」への再評価も、彼らがこの詩に準えて詩を作ったこととがあるのを前提として設定しなければならない。本論文では、「悟真寺詩」の再評価を手がかりにし、詩歌観が大

きく異なる乾隆帝と趙翼の遊覧を題材とする長篇五言古詩を検討し、その共通性を明らかにしたい。⁷⁾

一、乾隆帝と趙翼の「悟真寺詩」評論について

乾隆十五年（一七五〇）成立、翌年刊、乾隆帝勅撰『御選唐宋詩醇』には、白居易「悟真寺詩」が収録され、詩の本文の末に、約五百字の評点がついている。詩を選んだ人、また評を書いた人は特定できないが、乾隆帝の序文によれば、「詩醇之選、則以二代風華、此六家為最。時於幾暇偶一涉獵、而去取評品、皆出於梁詩正等數儒臣之手（詩醇の選は、則ち以へらく二代の風華、此の六家は最と為り、と。時に幾暇に於ひて偶々に一涉獵し、而るに去取評品は、皆梁詩正など数々の儒臣の手に出づ）」（清高宗「御選唐宋詩醇」序）と、帝の好むところを伺い、臣下が各作品を取捨して抑揚するのである。よって、この本における白居易「悟真寺詩」の編入と評論は、乾隆帝を頂点として『御選唐宋詩醇』の編纂者集團の総合的な興味を反映する。その評論は次の通りである。

洋洋灑灑、一去讀去、幾於千巖競秀、萬壑爭流、目不給賞矣。就其中細尋之、則步驟井然、一絲不紊。首四句點清因遊寺而登山、並年月日俱細敘出。去山四五里至置寺於其間、寫寺外之景、曲折靈異、迴隔塵世、如入仙境、妙在回頭四門望四句作一頓、遂覺心神蕩漾、宛是初到神情。入門無平地一句作提筆、至聞之似寒蟬、敍寺中路徑之逶迤、樹木之蒼鬱、首憩賓位亭、至可以降靈仙、細敍寺中所歷之境、與相傳之法物、開北戸而前行、又回顧而見來路、是以對多寶塔也。玉像殿觀音堂皆寺四界。是時秋方中至竟夕不欲眠、摹寫夜中之景、與八月月上弦一句相映、又作一束。曉尋南塔路至欲返仍盤桓、歷敍連日所遊之境、變化出之。由南而東而中而上、不言北者、自入寺門大抵皆向北行也。其間有神像、有峰巖、有水、有怪石、有白蓮、有祠、有臺、有畫、有書。細細寫出日落月上、復帶敍次日由晝入夜之景、更不拖沓。寫經僧、誦經弟子只虛寫、在傳聞上敍出。靈境與異跡四句作一總束。一遊五晝夜又與八月月上弦照應。我本山中人至末收足遊字意。四十餘、三十年又與元和九年照應。細玩全詩、分明以作記序手筆用之於詩、韓愈南山詩以奇肆勝、此以秀折勝、可謂匹敵。謝靈運遊山詩、柳宗元山水記素稱奇構、以彼方此、不無廣狹之別矣。

洋洋たり洒洒たり、一去にして読み去らば、千岩は秀を競ひ、万壑は流れを争ふに幾く、目は賞する給あらざるなり。其の中に就きて細しく之を尋ねば、則ち步驟井然たり、一糸も紊れず。首めの四句は寺に遊ぶによりて山に登ることを点清し、並びに年月日も俱に細しく叙出す。「去山四五里」より「置寺於其間」に至るは、寺外の景を写し、曲折なり靈異なり、廻かに塵世を隔て、仙境に入るが如く、妙は「回頭四門望」四句は一頓を作すに在り、遂に心神蕩漾たるを覚へ、宛も是れ初めて到る神情のごとし。「入門無平地」一句は提筆を作し、「聞之似寒蟬」に至るは、寺の中に路經の逶迤たり、樹木の蒼鬱たるを叙ぶ。「首憩寶位亭」より「以降靈仙」に至るは、細しく寺の中に歷る所の境と、相ひ伝ふるの法物とを叙ぶ。北戸を開けて前に行き、又た回顧して来たる路を見、是れを以て多宝塔に対ふなり。玉像殿、觀音堂は皆寺の四界にあり。「是時秋方中」より「竟夕不欲眠」に至るは、夜の中の景を摹写し、「八月月上弦」一句と相映して又一束を作す。「曉尋南塔路」より「欲返仍盤桓」に至るは、連日遊ぶ所の境を歴叙す。南よりにして東して中して上り、北を言はざるは、寺門に入るより大抵皆北に向ひて行くなり。其の間に神像有り、峰岩有り、水有り、怪石有り、白蓮有り、祠有り、台有り、画有り、書有り。細細として日落ち月上ることを写出し、復た帶ぶるに次日昼より夜に入るの景を叙べ、更に拖沓せず。写經の僧、誦經の弟子は只虚写し、伝聞の上に在りて叙出するのみ。靈境と異跡との四句は一つの総束を作す。「二遊五晝夜」は又「八月月上弦」と照応す。「我本山人」より末に至るは遊の字の意を収めて足る。全詩を細しく玩さば、分明として記序を作る手筆を以て、之れを詩に用ひ、韓愈の南山詩は奇肆を以て勝り、此れは秀折を以て勝り、匹敵と謂ふべし。謝靈運の遊山詩、柳宗元の山水記は素より奇構と称するも、彼を以て此に方ふれば、広狹の別無きはなし。(清高宗『御選唐宋詩醇』卷二十一)

と、まず、雑多な物事を一首の作品に集中していながら、作品はまた理路整然としている、という概説をつける。従来、白居易の長篇は瑣末だ、という悪評を払おうとする意図が込められたようである。次に、評論者は白居易の移動を基準として、詩を段分けて帰納する。そして、時間や位置などの照応関係を解説する。最後、散文の記序体で書かれたこの詩が、韓愈「南山詩」に匹敵し、謝靈運の山水詩、柳宗元の遊記を凌ぐ雄篇だと位置付けられる。評論者が「悟真寺詩」の表現技巧を撰取しようとする意欲は、この丹念な分析に窺える。

ちなみに、同時期に「悟真寺詩」を記体と見做すものは、また方世挙（一六七五～一七五九）『蘭叢詩話』がある。しかし、これは「但長篇大作、不知不覺、自入文體。：杜之北征、序體。八哀、狀體。白之遊悟真寺、記體。（但し長篇大作は、知らず覺へず、自ら文體に入る。：杜の北征、序體なり。八哀、狀體なり。白の遊悟真寺、記體なり）」と述べたように、長篇詩歌の構造に対する通論にすぎない。

『御選唐宋詩醇』に次ぎ、趙翼『甌北詩話』も「悟真寺詩」を精読した。『甌北詩話』は作家論の詩話で、唐の代表作家として李白・杜甫・韓愈・白居易の四家を各一卷ずつに分けて評論した。李・杜・韓・白という四家の順番は、『御選唐宋詩醇』には李・杜・白・韓であったが、青木正児が指摘したように、その人選は同じである。⁽⁹⁾そして、『甌北詩話』における「悟真寺詩」評論も、そのテキストに『御選唐宋詩醇』の面影が強く見て取れる。

今以其詩與南山相校、南山詩但儻侗摹寫山景、用數十或字、極力刻畫、而以之移寫他山、亦可通用。悟真寺詩、則先寫入山、次寫入寺、先憩賓位、次至玉像殿、次觀音巖、點明是夕宿寺中。明日又由南塔路過藍谷、登其巔。又到藍水環流處、上中頂最高峰、尋謁一片石、仙人祠。迴尋畫龍堂、有吳道子畫、褚河南書。總結登歷、凡五日。層次既極清楚、且一處寫一處景物、不可移易他處、較南山詩似更過之。又北征、南山皆用仄韻、故氣力健舉、此但用平韻、而逐層鋪敘、沛然有餘、無一語冗弱、覺更難也。

今其の詩を以て南山と相ひ校せば、南山詩但だ儻侗として山景を摹写し、数十の或字を用ひ、力を極めて刻画するのみ、而るに之れを以て移して他の山を写せば、亦た通用すべし。悟真寺詩ならば、則ち先ず入山を写し、次に入寺を写す。先ず賓位に憩ひ、次に玉像殿に至り、次に觀音岩、是の夕、寺の中に宿することを点明す。明日、又た南塔路より藍谷を過ぎり、其の巔に登る。又た藍水環流の処に到り、中頂の最高峰に上り、一片石、仙人祠を尋ねて謁す。迴りて画竜堂に尋ね、吳道子の画、褚河南の書有り。登歷を総結し、凡そ五日あり。層次既に極めて清楚なり、且つ一つの処に一つの処の景物を写し、他の処に移易すべからず、南山詩に較ぶれば、更に之に過るが似し。又北征、南山は皆仄韻を用ひ、故に氣力健舉なり、此れ但だ平韻を用ふるのみ、而うして逐層にして鋪叙し、沛然として余有り、一語の冗弱なること無く、更に難しと覺ゆるなり。（趙翼『甌北詩話』卷三）

と、まず、『御選唐宋詩醇』のように、「賓位(亭)」「觀音岩」「一片石」など景勝を羅列して、詩の豊富性と条理性を強調する。更に平声韻を百三十回踏みながら強い表現力を維持できるという白居易の筆力に趙翼が心酔していて、これは杜甫「北征」、韓愈「南山詩」以上の難技だ、という独自の見解に辿り着く。このように、押韻問題に関心を寄せることは、趙翼がいよいよ長篇五言古詩の創作実践に迫っていたことを語る。

上記の通り、これらの評論は①内容の豊富性②構造の条理性③照応関係④押韻の筆力、という四つの面から「悟真寺詩」を吟味して位置づける。よって、乾隆帝と趙翼がこの詩に準えて百韻以上、或は百韻の五言古詩を創作したことも想像できるだろう。しかし、乾隆帝『御製詩集』と趙翼『甌北集』を繙けば、このような作品が見当たらない。「悟真寺詩」への至高の評価と欠如する模擬作は相反している。とはいえ、一步を譲って、二人の遊覧を題材とする五言古詩には、三十韻あたりの作品が存在する。これらの作品の中に、実には「悟真寺詩」からの影響が見出せる。百三十韻の白居易「悟真寺詩」と、乾隆帝・趙翼の一層短くなる三十韻の作品との関係については、次節において、まず乾隆帝の作品を中心にして考察したい。

二、「悟真寺詩」の縮約形としての三十韻の五言古詩

さて、乾隆十六年(一七五二)作、帝の「甘露寺和蘇軾韻」を見よ。これを例とする理由は、乾隆帝が蘇軾の原作「甘露寺」⁽¹³⁾に次韻した一方、蘇軾の原作も白居易の「悟真寺詩」を模倣した。三十二韻のみ有る蘇軾「甘露寺」と百韻三十韻を踏む白居易「悟真寺詩」との間に、九十八韻の差があるにもかかわらず、文字上も構造上も近似の表現が多く見て取られる。そこで、まず、甘露寺と蘇軾の原作との背景を紹介しよう。甘露寺は、宋の潤州、清の鎮江の北固山に位置し、中唐の李德裕の布施より建てられ、鎮江地方屈指の名勝である。蘇軾は、熙寧四年(一〇七二)、潤州から杭州へ向かって通判に就任し、その途次、甘露寺を訪れた。詩の一節を「悟真寺詩」と合わせて挙げてみたい。

9 古郡山為城 古郡は山を城と為し、

—— 13 山下望山上 山下 山上を望めば、

乾隆帝と趙翼の長篇五言古詩

10 層梯轉朱欄 層梯に朱欄を転らす。

11 樓臺斷崖上 樓台 断崖の上、

12 地窄天水寬 地窄く 天水寛し。

13 一覽吞數州 一覽して 数州を吞み、
14 山長江漫漫 山は長く 江は漫漫たり。

15 卻望大明寺 却りて大明寺を望めば、
16 惟見煙中竿 惟だ煙中の竿を見るのみ。

蘇軾「甘露寺」(『蘇軾詩集』卷七)

14 初疑不可攀 初めは疑ふ攀づべからざるかと。

27 如擘山腹開 山腹を擘いて開け、
28 置寺於其間 寺を其の間に置くが如し。

29 入門無平地 門に入れば平地無く、
30 地窄虛空寬 地窄くして虚空寛し。

46 首憩賓位亭 首め賓位亭に憩ひ、
47 就坐未及安 坐に就いて未だ安んずるに及ばず。

48 須臾開北戸 須臾にして北戸を開けば、
49 萬里明豁然 万里明らかにして豁然たり。

53 野綠族草樹 野緑 草樹族がり、
54 眼界吞秦原 眼界 秦原を吞む。

55 渭水細不見 渭水は細く見えず、
56 漢陵小於拳 漢陵は拳よりも小なり。

57 却顧來時路 却って來時の路を顧みれば、
58 縈紆映朱欄 縈紆して朱欄に映ず。

59 歷歷上山人 歴々たり山に上る人、
60 一一遙可觀 一一遙かに観るべし。

白居易「悟真寺詩」(『白居易詩集校注』卷六)

と、山道を登り、寺に入り、高点で眺望するという一連の活動を描く。蘇詩の第十二句「地窄天水寛」が白詩の第

三十句「地窄虛空寛」を出典とするのは、施元之によつて注釈された。しかし、施元之の看過したところかもしれないが、甘露寺の位置を指示する第十一句「樓台斷崖上」も、白詩の第二十七、二十八句「如擘山腹開、置寺於其間」を意識するものである。そして、登山過程を説明する蘇詩の第九、十句も、同じ場面を記述する白詩の第十三句からの十数句に当たる。さらに、蘇詩の第十三句からの四句は、自分の視界がまず各州の山水を収め、そして、来る方向に振り回せば、そこに大明寺が煙の中に立つ棒のように細く見える、と寺での眺めを描く。ここに、視覚を形容する「吞」字と、視点を変換する「却望」という動作とは、「悟真寺詩」を踏襲する表現である。引用された部分の後に、蘇軾は諸葛亮が座った「狼石」、梁の武帝が鑄た「鉄鑊」、張僧繇が描いた菩薩、陸探微が描いた「獅子」、李德裕が植えた柏樹、近來発掘された舍利と碑文などの文物が語られる。これも「悟真寺詩」における「尋謁一片石、仙人祠。迴尋畫龍堂、有吳道子画、楮河南書」（趙翼『甌北詩話』卷三）などの描写と重なり合う。

つまり、「甘露寺」は百三十韻の「悟真寺詩」を三十二韻に簡略化して、その縮約形といえるものである。一方、三十韻を踏む「甘露寺」は、実には蘇軾の五言古詩の中に屈指の大長篇に数えられる。注意に値するのは、『御選唐宋詩醇』が「甘露寺」を収録して、次のような評論をつけた。

就寺中所見器物、撫時懷古。每事各為段落、而感慨深情、別有規連矩洩之妙。

寺の中の見るところの器物に就き、時を撫し古を懷ふ。每事各々段落と為り、而して感慨して情深く、別に規は連なり矩は洩ぶるの妙有り。（清高宗『御選唐宋詩醇』卷三十三）

と、詩は各文物を記述して、段落も歴然し、感慨も無量し、配置の巧を尽くす。尚又乾隆帝の側近の紀昀も、「以敘記體行之、首尾完整、可為長篇之式（叙記の体を以て之を行ひ、首尾完整なり、長篇の式と為るべし）」と、この詩を「叙記体」で書かれた長篇詩歌と考えた。よつて、乾隆帝とその周りの大臣から見れば、蘇軾「甘露寺」は、『御選唐宋詩醇』に「以作記序手筆用之於詩」と評される「悟真寺詩」と同類の作品である。こういうわけで、帝の「甘露寺和蘇軾韻」は、蘇軾「甘露寺」の和詩でありながら、白居易「悟真寺詩」の延長線上にあるといえる。この詩の背景については、乾隆十六年（一七五二）、帝は初回の南巡の途次、鎮江に駐蹕して甘露寺に行幸した。米芾「甘露寺」序によれば、蘇軾が言及した諸文物は、夙に宋の元符（一〇九八―一〇一）末に焼失されてしまった。

にもかかわらず、帝の詩興が薄れることはない。甘露寺の風景に心を突き動かされることより、この機会に乗じて長篇五言古詩という詩型に挑もうとするのは、帝の本音ではなからうか。そして、帝の作品には、蘇軾「甘露寺」を越えて、直接に白居易「悟真寺詩」の表現を摂取したところが見出せる。

- | | |
|----------|----------------|
| 7 捨舟而遵陸 | 舟を捨て陸に遵ひ、 |
| 8 快控青驄鞍 | 快く 青驄の鞍を控ふ。 |
| 9 左右綠麥畦 | 左右に 綠麦の畦あり、 |
| 10 曲折朱木欄 | 曲折す 朱木の欄を。 |
| 11 比日多舟居 | 比日 舟に居ること多く、 |
| 12 乘馬意為寬 | 馬に乗りて意は寬しと為る。 |
| 13 南仰峰嶺摧 | 南のかた峰に仰がば嶺摧なり、 |
| 14 北俯波渺漫 | 北のかた波を俯せば渺漫たり。 |
| 15 尋筏步初地 | 筏を尋ねて初地に歩き、 |
| 16 參幡標刹竿 | 幡に参りて刹竿を標とす。 |

清高宗「甘露寺和蘇軾韻」
〔御製詩集〕「二集」卷二十三

- | | |
|----------|-----------------|
| 7 自茲捨車馬 | 茲より車馬を捨て、 |
| 8 始涉藍溪灣 | 始めて藍溪の灣を渉る。 |
| 9 手拄青竹杖 | 手に青竹の杖を拄へ、 |
| 10 足蹋白石灘 | 足に白石の灘を蹋む。 |
| 11 漸怪耳目曠 | 漸く耳目の曠きを怪しみ、 |
| 12 不聞人世喧 | 人世の喧しきを聞かず。 |
| 13 山下望山上 | 山下 山上を望めば、 |
| 14 初疑不可攀 | 初めは疑ふ攀づべからざるかと。 |
| 15 誰知中有路 | 誰か知らんに路有り、 |
| 16 盤折通岩巔 | 盤折して岩巔に通ずるを。 |
| 17 一息幡竿下 | 一たび幡竿の下に息ひ、 |
| 18 再休石龕邊 | 再び石龕の辺に休む。 |

白居易「悟真寺詩」〔白居易詩集校注〕卷六

と、寺に辿る道を描く一節である。蘇軾「甘露寺」の相当部分は第九から第十二句あたりで、すでに前文に挙げられた。三人の作を比較すれば、移動手段を変換して進むことと、晴れていく心情と、寺へ向かう途中の目印としての旗と、これらの三つの場面は、白居易「悟真寺詩」と乾隆帝「甘露寺和蘇軾韻」とに見えるが、蘇軾「甘露寺」には該当する描写がない。その為、帝が「甘露寺和蘇軾韻」を作る際、蘇軾の原作だけではなく、その源頭たる白居易「悟真寺詩」をも意識していた。このような現象は、また『御選唐宋詩醇』の編者の梁詩正が帝の作に奉和する「恭和御製甘露寺和蘇東坡韻^①」に看取できる。

15 回首浮玉山 首を回らせば 玉山浮かび、

16 歴歴多帆竿 歴々たり帆竿多し。

:

27 尚餘古鐵鑊 尚ほ古の鉄鑊を余し、

28 蘇暈生微瀾 蘇暈 微瀾を生ず。

29 甲子誰所記 甲子 誰か記す所や、

30 仿佛欽銅盤 仿佛として 欽銅盤のごとし。

梁詩正「恭和御製甘露寺和蘇東坡韻」(『矢音集』卷八)

と、まず、頭を振り回すという動作である。前にも触れたが、蘇軾「甘露寺」の第十五、十六句ではその視点を単数の「大明寺」に絞った。これに対して、梁詩正の作では、白居易「悟真寺詩」の表現に即して、視点を「歴々」といったように複数のものに合わせた。次に、「鉄鑊」に関する描写である。緑青の様子を描く「生微瀾」という三文字は、蘇軾「甘露寺」の「28積雨生微瀾(積雨微瀾を生ず)」をそのまま踏襲した一方、「鉄鑊」の制作年代に対する「甲子誰所記」という質問表現は、白居易「悟真寺詩」の「玉笛何代物」を意識していた。

上記の通り、乾隆帝を頂点として『御選唐宋詩醇』の編纂者集団は白居易「悟真寺詩」を貴ぶと同時に、その表現を自分の作品に活用していることがわかる。しかし、なぜ彼らは、百韻の五言古詩を作ることに及ばず、ただ三十韻あたりのものに止まったのか。乾隆帝「甘露寺和蘇軾韻」の後半には、その一つの答案が見える。

55 東坡詩中仙 56 五字留吟安 東坡 詩中の仙、五字を留めて 吟じ安んず。

57 豪氣驅雄才 58 力敵扶搖搏 豪氣 雄才を駆り、力 扶搖に敵ひて搏つ。

59 倚韻成長篇 60 非欲為其難 韻に倚りて 長篇を成すは、其の難を為さんと欲するに非ず。

清高宗「甘露寺和蘇軾韻」(『御製詩集』「二集」卷二十三)

57 却顧來時路 却つて來時の路を顧みれば、

58 縈紆映朱欄 縈紆して朱欄に映ず。

59 歷歷上山人 歴々たり山に上る人、

60 一一遙可觀 一一遙かに觀るべし。

:

95 隔瓶見舍利 瓶を隔てて舍利を見る、

96 圓轉如金丹 円転 金丹の如し。

97 玉笛何代物 玉笛 何れの代の物ぞ、

98 天人施祇園 天人 祇園に施す。

白居易「悟真寺詩」(『白居易詩集校注』卷六)

と、蘇軾の原作は、扶搖をうって上昇する鵬に匹敵する力量を持ち、そして、私がそれに次韻して長篇を作るのは、その難技に挑むつもりではないと、帝が述べる。乾隆帝はその生涯にわたって四万四千三十八首の詩歌を残って旺盛な創作欲を表した人である。とはいえ、これは必ずしも帝が数十・百韻の長篇古詩を自由に操作できることを意味するわけではない。なぜなら、作詩を暇の遊びと見做し、一首の作品を鍛えぬく耐性がないという帝の態度上の緩みもその一因である。その上で、白居易の如きの筆力の欠如こそ最大の原因である。そして、これは乾隆帝に限らず、趙翼にも共通していることであろう。次節からは、二人の実作をもって、この問題を検討したい。

三、乾隆帝と趙翼の長篇五言古詩

『御選唐宋詩醇』刊行のあたりに、乾隆帝の長篇五言詩は、また同十四年「遊東甘澗古中盤諸勝即景三十韻」、同十九年「杪秋遊醫巫閭山得五言三十韻」二首がある。「遊東甘澗古中盤諸勝即景三十韻」は、乾隆十四年（一七四九）九月二十一日、帝が盤山の東甘澗、古中盤に行幸して、その体験を記録したものである。^⑭帝はこれまで盤山に八回も行幸し、多数の作品を書いた。その中に唯一の長篇五言古詩として、この詩は帝が該当詩型に挑む試作だと見做される。もしこの詩の叙景表現を白居易「遊悟真寺詩」の相当の一部分に比べれば、

19 仍尋向來路 仍向來の路を尋ね、
20 盤廻度雲嶠 盤回として雲嶠を度る。
21 松門界別徑 松門 別徑に界し、
22 石闔開天奧 石闔 天奥を開く。
23 蒙茸攀煙蘿 蒙茸として煙蘿を攀じ、
24 詰屈窮水隩 詰屈として水隩を窮む。
25 仄棧歷嶮嶸 仄棧 嶮嶸として歴、
26 深林攪茂冒 深林 茂冒として攪る。

109 曉尋南塔路 曉に尋ぬ南塔の路、
110 亂竹低嬋娟 乱竹低れて嬋娟たり。
111 林幽不逢人 林幽にして人に逢はず、
112 寒蝶飛翾翾 寒蝶飛びて翾翾たり。
113 山果不識名 山果 名を識らず、
114 離離夾道蕃 離離として道を夾みて蕃し。
115 足以療饑乏 以て飢乏を療するに足り、
116 摘嘗味甘酸 摘み嘗むれば味甘酸。

清高宗「遊東甘澗古中盤諸勝即景三十韻」

『御製詩集』「二集」卷十三

と、来る道に戻って、そして、分かれ道を歩き、自然風景を満喫するという体験を描く。東韻冬韻の「蒙茸」と溪母の「詰屈」との対偶及び緝韻洽韻の「嶮嶮」と明母の「茂冒」との対偶は共に双声疊韻語を掛け合い、起伏の音調で山水の奥深さを伝える。しかし、長篇古詩の叙景にとつて、これはあまりにも凝縮的な表現である。これに對して、白居易「悟真寺詩」は同じ場面において、竹の垂れ、蝶の飛び、果実の滋味など、物事の具体的な様子を表すことができる。この表現の具体性の差は、景勝を描く際、一層明らかになる。

39 懸崖飛瀑水

懸崖 瀑水を飛し、

40 切顯聳瑤臺

切顯として瑤台聳つ。

(自注) 右聖水盆

41 尚有芝英碣

尚ほ芝英の碣有り、

42 寧妨薦福雷

寧んぞ薦福の雷を妨げんや。

(自注) 右蟬蚪碑

43 武陵雖假借

武陵は假借すと雖も、

44 洞口試徘徊

洞口に徘徊するを試みる。

45 作記徵彭澤

記を作り 彭沢を徵し、

46 成詩憶楚材

詩を成し 楚材を憶ふ。

(自注) 右桃花洞

47 寧知進士第

寧んぞ知らんや 進士の第は、

48 轉遜岳陽杯

轉た岳陽の杯に遜るるを。

(自注) 右呂公巖 (清高宗「杪秋遊醫巫閭山得

五言三十韻」『御製詩集』「二集」卷五十三)

白居易「悟真寺詩」(『白居易詩集校注』卷六)

と、来る道に戻って、そして、分かれ道を歩き、自然風景を満喫するという体験を描く。東韻冬韻の「蒙茸」と溪母の「詰屈」との対偶及び緝韻洽韻の「嶮嶮」と明母の「茂冒」との対偶は共に双声疊韻語を掛け合い、起伏の音調で山水の奥深さを伝える。しかし、長篇古詩の叙景にとつて、これはあまりにも凝縮的な表現である。これに對して、白居易「悟真寺詩」は同じ場面において、竹の垂れ、蝶の飛び、果実の滋味など、物事の具体的な様子を表すことができる。この表現の具体性の差は、景勝を描く際、一層明らかになる。

141 東南月上時

東南 月上る時、

142 夜氣青漫漫

夜氣青くして漫漫たり。

143 百丈碧潭底

百丈 碧潭の底、

144 寫出黃金盤

寫し出たず黄金の盤。

145 藍水色似藍

藍水は色 藍の似し、

146 日夜長潺潺

日夜長に潺潺たり。

147 周廻繞山轉

周廻して山を繞りて轉じ、

148 下視如青環

下視すれば青環の如し。

149 或鋪為慢流

或いは鋪いて慢流と為り、

150 或激為奔湍

或いは激して奔湍と為る。

151 泓澄最深處

泓澄 最る深き処、

152 浮出蛟龍涎

浮かび出づ蛟龍の涎。

白居易「悟真寺詩」(『白居易詩集校注』卷六)

と、醫巫閭山は、錦州府にある。北方幽州の鎮守の山として、その祭祀は「北鎮」の名義で隋より清まで持続している。¹⁹そこにある四つの景勝に対して、帝は十句をかけて描いたが、「聖水盆」の二句を除いて他は全部典故を引いて間接的な描写である。例えば、「蝌蚪碑」を描くに、その書体を芝草のような「芝英書」²⁰に、その状態を雷に碎けられた薦福碑に置き換えて表現する。一方「聖水盆」を描く二句は、滝水が注ぎこむ石台を「切巖」と直叙するが、「切巖」は帝の造語だと考えられる。切は清さを、巖は白また盛大を意味し、清くて白い水気が染み渡って、その中に石台が聳えているという様子を表そうとする。硬質な表現である。これに対して、白居易「悟真寺詩」は「碧潭藍水」の鳥瞰という一箇所の景勝に十二句を重ね、湖面の月の投影から川の深んどの泡までの各景色を読み手に伝える。

白居易との比較を通し、典故と造語を用いることに長ずる乾隆帝は、景物を直叙することに至って、力が及ばないということがわかる。よって、帝は豊富な典故で飾られる排律を五十韻ないし百韻まで綴れるが、高度の実写を要求する長篇五言古詩に至って、三十韻あたりに筆を擱いた。これは、『御選唐宋詩醇』ではその評者が「悟真寺詩」の①内容の豊富性、また豊富な内容を配置できる②構造の条理性③照応関係に賛辞を捧げている理由であろう。そして、趙翼の場合、その「悟真寺詩」への評論に鑑みれば、彼も長篇五言古詩における筆力の不足という悩みを抱えていた。考察対象として、まず、乾隆四十九年（一七八四）作、彼の最長の五言古詩である「万寿重寧寺五十韻」を挙げたい。重寧寺は揚州にあり、乾隆帝の南巡を祝う工事として、詩の作った当年に落成した。このような背景を持ち、「万寿重寧寺五十韻」は寺の絶景を描いた後、その奢侈を嘆いて帝の儉徳を礼賛し、「引之節儉（之を節儉に引く）」（『史記』卷一一七「司馬相如列伝」）という賦の性格を有する。故に、この詩は、

13 廣殿俯城闌 14 重簷接象緯

広殿 城闌を俯し、重簷 象緯に接す。

15 瓦筒黃流金 16 瓴甌碧滑水

瓦筒 黄なりて金を流れ、瓴甌 碧くて水滑らかなり。

17 丹楹千步廊 18 白玉九層庀

丹楹 千歩の廊、白玉 九層の庀。趙翼「万寿重寧寺五十韻」（『甌北集』卷二十八）

と、主に静態的な叙景によって構成される。このような華麗でありながら没個性的な表現は、正に『甌北詩話』では趙翼が韓愈「南山詩」を「但儻侗摹寫山景、用數十或字、極力刻畫、而以之移寫他山、亦可通用」（『甌北詩話』

卷三)と非難しているところである。趙翼はこの作品を自選集『甌北詩鈔』²³に収録しない原因も、ここにあるだろう。しかし、一旦趙翼が「龕伺」的な描き方を放棄して、描写の適切さを求めれば、彼は詩を五十韻に綴ることができなくなった。例として、嘉慶七年(一八〇二)作、「靈谷寺」が挙げられる。靈谷寺は、南京の鍾山にあり、六朝の異僧の宝誌の肉身仏を供養する名所である。乾隆五十七年(一七九二)、趙翼はすでに七言律詩「靈谷寺」(『甌北集』卷三十五)一首を作ったが、今回は同じ題材をもつて長篇五言古詩という詩型に挑むようである。この詩は『甌北詩鈔』卷四に所収され、作者自身の認めを得る。詩の叙景の部分は、次のように、

5 山門到堂廡 6 鞭馬嫌不速 山門より堂廡に到り、馬を鞭うちて速からざるを嫌ふ。

7 中恢無梁殿 8 制彷彿陶復 中に無梁の殿を恢くし、制は古の陶復^{たうふく}に彷彿。

9 累甃代棟隆 10 穹作層阿屋 甃を累ねて棟隆に代り、穹は層阿の屋を作る。

11 旁有琵琶街 12 屢響賽琴筑 旁らに琵琶街有り、屢響きて琴筑^{なせり}に賽ふ。

13 最後功德水 14 趺突地底伏 最後は功德水、趺突 地底に伏す。

15 憤盈一涌出 16 直上三丈竹 憤盈として一に涌き出で、直ち三丈の竹に上る。

17 鍾魚腫僧顚 18 丹碧眩鳥目 鍾魚 僧の顚^はを腫れしめ、丹碧 鳥目を眩^{くら}ます。

19 當年誰結構 20 巨麗壓坤軸 當年 誰か結構せんや、巨麗 坤軸を圧ふ。

趙翼「靈谷寺」(『甌北集』卷四十四、『甌北詩鈔』卷四)

と、ここに、趙翼が表そうとするのは、靈谷寺の「巨麗」ではなく、穹窿構造の「無梁殿」などの景勝及び俗世の喧騒に染められている寺の雰囲気、という彼が靈谷寺に対する独自の感覚である。第八句の「陶復」という語は『詩経』「繇」を典故とし、陶瓦器で壁を敷きて窯洞を作ることを指す。棟の無い穹窿構造の建物の内部景観を適切に描き出す。そして、第十七句の「腫僧顚」という表現は、硬質でありながら、僧侶たちすら耐えきれない寺の騒ぎを読み手に伝える。

一方、叙景の部分は上記の第二十句に止まる。詩の第二十一句から結尾までの四十句は、明の太祖が靈谷寺を今の位置に遷移し、そして、成祖はここに天竺の異僧の哈立麻に法会を開催させたなど、寺の歴史を遡って論ずる。

叙景より、史学に長ずる趙翼にとって、このような歴史評論こそ彼が筆を走らせる領域である。乾隆五十二年（一七八七）作、二十二韻の「仙霞嶺」（『甌北集』卷三十一）も同じように、詩の最初の十韻は叙景で、第十一韻から結尾までは仙霞嶺をめぐる福建省の割拠史に関する歴史評論である。十韻二十句あたりの幅は、趙翼にとって、程の良い景色描写である。

そこで、「羅浮紀遊十首」を見よ。乾隆三十六年（一七六一）、趙翼が広東知府より貴西兵備道に昇進する任命を受け、後継者の到達を待っている間に、羅浮山に数日間に遊んでいた。この出遊の顛末を、彼が一首にあたり約十韻を踏む十首の五言古詩に分けて記述した。もし韻目の変換を無視して十首の詩を合わせれば、それは百三韻まで重なり、一首の長篇五言古詩になる。ところが、趙翼が十首の形に分けて記述したのは、その筆力の不足ではなからうか。連作の第四、第六首の冒頭の四句をそれぞれに挙げて、彼の表現上の窮屈を考察すれば、

- 1 迢迢黃龍洞 迢迢たる黃龍洞、
- 2 南漢天華宮 南漢の天華宮。
- 3 我來拾級登 我来たり 拾級して登り、
- 4 邱壑何玲瓏 邱壑 何ぞ玲瓏たる。

趙翼「羅浮紀遊十首」其四

（『甌北集』卷十七、「甌北詩鈔」無し）

と、まず、「黃龍洞」「飛雲（峰）」という景勝の名を記し、そして、自分の移動に従って目に映った景色を描く。両詩の書き方は重複のように見える。『甌北詩鈔』では「羅浮紀遊十首」を五首に縮め、「黃龍洞」を描く第四首を削除し、「飛雲峰」に関する第六首を保留するのは、このような表現上の重複を避けようとするのである。

すると、韻目を改めて、より自由的に文字を操作できる連作でさえ、表現の単調を免れず、一つの韻目を百回以上綴るのは、更に言うまでもない。創作において、このような甘苦を充分に味わったことにより、『甌北詩話』では趙翼が白居易「悟真寺詩」に対して、④押韻の筆力、つまり平声韻を百三十回踏みながら強い表現力を維持できるという独自の賛辞を捧げている。そして、「悟真寺詩」への吟味を通して、趙翼の筆力も向上した。この点につい

- 1 飛雲五千仞 飛雲 五千仞あり、
- 2 雲聚族而衆 雲聚まり 族まりて衆し。
- 3 我行入迷茫 我行きて迷茫に入り、
- 4 目力不得縱 目力を縦にするを得ず

趙翼「羅浮紀遊十首」其六

（『甌北集』卷十七、「甌北詩鈔」卷二）

て、『甌北詩話』刊行の一年後、嘉慶八年（一八〇三）作、「偕王仲瞿孝廉蔣于野秀才遊洞庭東西兩山時吳鼎湯明府為治裝七首」（以下「遊洞庭東西兩山」と略称す）に裏付けられる。東西洞庭山は、太湖にある小島である。この連作は「羅浮紀遊十首」と同じ、出遊の顛末を一首にあたり約十韻を踏む七首の五言古詩に分けて記述する。『甌北詩鈔』には、この七首の作品が全部収録され、趙翼の自信作だと言える。まず、その第六首を挙げて、彼が「悟真寺詩」の一部分を書き改めた第六首を確認したい。

- 4 我來秉炬探 我來たりて炬を秉り探せば、
- 5 實可五六里 實に五六里ばかり。
- 6 蝙蝠驚火光 蝙蝠 火光に驚き、
- 7 撲面亂飛起 面を撲ち 乱れて飛び起る。
- 8 其下坎陷處 其の下 坎陷の処、
- 9 膝行不得跬 膝行して跬を得ず。
- 10 匍匐泥滿身 匍匐して泥は身に満ち、
- 11 笑比負塗豕 笑ふ 塗を負ふ豕に比すること。

趙翼「遊洞庭東西兩山」其六

（『甌北集』卷四十五、『甌北詩鈔』卷四）

と、洞庭西山にある「林屋洞」を探索するという体験である。「遊悟真寺」では岩に登り、下からの風に吹かれて服が翼のように羽ばたいているという感覚を、洞窟に入り、身が泥の中にある豚のように汚れまみれになったという体験に置換する。「負塗豕」とは『易』「睽」を出典とする語彙である。趙翼は典故と直叙とを融合させて、自分の体験を適切に描き出した。このような表現上の豊富さは、第二、第四首の冒頭部にも見える。

- 1 洞庭本湖名 洞庭は本より湖の名、
- 2 今名湖中嶺 今湖中の嶺を名づく。
- 3 七十有二峰 十有二の峰あり、

乾隆帝と趙翼の長篇五言古詩

- 129 我來登上頭 我來りて上頭に登り、
- 130 下臨不測淵 下 不測の淵に臨む。
- 131 目眩手足掉 目眩み手足掉るひ、
- 132 不敢低頭看 敢へて頭を低れて看ず。
- 133 風從石下生 風は石下より生じ、
- 134 薄人而上搏 人に薄りて上り搏つ。
- 135 衣服似羽翮 衣服は羽翮に似て、
- 136 開張欲飛翥 開張して飛び翥がらんと欲す。

白居易「悟真寺詩」（『白居易詩集校注』卷六）

- 1 莫釐最高頂 莫釐 最高の頂、
- 2 俯瞰全湖光 俯瞰す 全湖の光を。
- 3 三萬六千頃 三萬六千頃、

4 東西列屏整 東西のかた 屏を列ぶること整ふ。

4 澹澹盪我腸 澹澹として我が腸を盪ふ。

趙翼「遊洞庭東西兩山」其二（同前）

趙翼「遊洞庭東西兩山」其四（同前）

と、まず「洞庭山」「莫釐峰」というという景勝の名を記し、そして、その数量と面積を描く。その書き方は一見にして重なったが、一は太湖から洞庭山を遠望してその風景を直叙し、一は莫釐峰から太湖を俯瞰して自分の感覚を伝える。視点の変換によって、「羅浮紀遊十首」のような表現上の重複を免れる。そして、自己の感覚を伝えようとする第四首は、

173 中頂最高峰 174 拄天青玉竿

中頂の最高峰、天を拄ふ青玉竿。

175 鯢鮪上不得 176 豈我能攀援

鯢鮪も上り得ず、豈に我能く攀援せんや。

白居易「悟真寺詩」（『白居易詩集校注』卷六）

と、白居易の作品における自分が嶺を仰ぐという一節を異なる視点で書き改めたものである。

清乾隆嘉慶期の詩壇は、在来の王漁洋の「神韻説」に対して、その一律な作風を厭い、詩人たちは各自の性格嗜好によって、それぞれの道を開いていた。白居易に関する評価もこの新潮に乗じて、貴ばれるようになった。このような文芸史や批評史などの巨視的な考察は、これまで充分に行われてきた。本文では、焦点を白居易「悟真寺詩」という異例の長篇五言古詩に当てて、乾隆帝と趙翼の作品を微視的に精読することを通し、そこに「悟真寺詩」を模倣した表現があることを確認した。乾隆帝と趙翼が三十韻あたりの五言古詩の創作に手をかけた際、二人が表現上に、或は押韻上に挫けた。そこで、二人は古詩の幅を極限的に伸ばしながら優れる表現力を維持できる白居易「悟真寺詩」を至高の手本として崇めていた。僅かな一例であるが、この時期において、詩人の創作がどのようにその批評を形づくるのかという問題を回答できる。

注

（1）白居易「悟真寺詩」は、謝思煒『白居易詩集校注』（中華書局、二〇〇六年）を底本とする。また白居易「悟真寺

詩」の表現に関する先行研究は、川合康三「ことばの過剰―唐代文学の中の白居易―」（『白居易研究講座』第二巻、誠誠社、一九九三年）を参照。

- (2) 楊万里『誠齋詩話』（辛更儒箋校『楊万里集箋校』巻一一四、中華書局、二〇〇七年）に「五言長韻、如遊悟真寺一百韻、真絶唱也。」という一言の評論がある。

- (3) 清高宗『御選唐宋詩醇』は、乾隆二十五年紫陽書院重刊『御選唐宋詩醇』（国立公文書館デジタルアーカイブ、内閣文庫蔵、www.digital.archives.go.jp/file/1071791）を底本とする。

- (4) 『甌北詩話』は、霍松林、胡主佑校点『甌北詩話』（人民文学出版社、一九六三年）を底本とする。

- (5) 水野平次『新講支那文学史』第三編第二章第三節「元和長慶の韓白両家」（東洋図書、一九三二年）、岡村繁『白氏文集』二上巻五「遊悟真寺一百三十韻」「余説」（明治書院、二〇〇七年）を参照。

- (6) 尚永亮「從『淺俗』之否定到多元之闡釈——清前中期白居易詩接受的階段性變化及其要因」（『復旦學報（社会科学版）』、二〇一〇年第五期）を参照。

- (7) 本文における「長篇五言古詩」は、遊覧を題材とする作品に限定される。

- (8) 「蘇東坡云、樂天善長篇、但格製不高、局於淺切、又不能變風操、故説而易厭矣」、高棟編、張詢重訂『唐詩品集』巻二十一「白居易」（国立公文書館デジタルアーカイブ、本館蔵、www.digital.archives.go.jp/irng/3671579）を参照。同じテキストは、胡震亨『唐音癸籤』巻七「評彙三」（古典文学出版社、一九五七年）にもある。

- (9) 方世拳『蘭叢詩話』は、張寅彭『清詩話全編』乾隆期三（上海古籍出版社、二〇二〇年）を底本とする。

- (10) 青木正児『清代文学評論史』第六章「格調・性靈両詩説の対立」四「蔣士銓（清容）と趙翼（甌北）」（『青木正児全集』第一巻、春秋社、一九六九年）を参照。

- (11) 乾隆帝の作品は、『清高宗御製詩文全集』（国立故宫博物館、一九七六年）を底本とする。

- (12) 趙翼の作品は、李学穎、曹光甫校点『甌北集』（上海古籍出版社、一九九七年）を底本とする。

- (13) 蘇軾の作品は、孔凡礼点校『蘇軾詩集』（中華書局、一九八二年）を底本とする。

- (14) 孔凡礼点校『蘇軾詩集』巻七「甘露寺」「誥案」を参照。

乾隆帝と趙翼の長篇五言古詩

- (15) 「元符末一旦為火所焚、六朝遺物掃地、李衛公祠、手植櫓亦焚蕩」、米芾『宝晋英光集』卷四「甘露寺」序(台湾学生書局、一九八五年)を参照。
- (16) 梁詩正『矢音集』は、『清代詩文集彙編』第二八五冊(上海古籍出版社、二〇〇九年)を底本とする。
- (17) 高策「清高宗御製詩文創作流程及代筆問題探疑——以新見『乾隆御稿』為核心」(『文獻』第四期、二〇二三年七月)を参照。
- (18) 阿桂修『盛京通志』卷九十八「祠祀二・広寧県北鎮廟」(遼海出版社、一九九七年)を参照。
- (19) 蔣溥『盤山志』卷首一「巡典」(江蘇広陵古籍刻印社、一九九三年)を参照。
- (20) 「蕭子良撰古文之書五十二種…芝英倒薤」、封演撰、趙貞信校注『封氏聞見記校注』卷二(中華書局、二〇〇五年)を参照。
- (21) 例えば、「六月朔日自香山遊聖感諸勝即景成詩得五十韻」(『御製詩集』「二集」卷十三)、「避暑山莊百韻詩」(『御製詩集』「初集」卷四十三)などがある。
- (22) 阿史当阿修『嘉慶重修揚州府志』卷三「巡幸三・万寿重寧寺碑記」(江蘇古籍出版社、一九九一年)を参照。
- (23) 趙翼『甌北詩鈔』は、乾隆五十八年湛貽堂刊『甌北詩鈔』(古典籍総合データベース、早稲田大学図書館所蔵、wul.waseda.ac.jp/koshol/13/13_00951/)を底本とする。
- (24) 靈谷寺の歴史については、趙翼『簞曝雜記』卷五(中華書局、一九九七年)にも言及される。
- (25) 「羅浮紀遊十首」各首の韻数について、其一是九韻、其二是九韻、其三是十一韻、其四是十一韻、其五是十一韻、其六是十一韻、其七は十韻、其八は十三韻、其九は十一韻、其十は十三韻である。『甌北集』卷十七を参照。
- (26) 『甌北詩鈔』卷二「羅浮紀遊」には、「羅浮紀遊十首」の其一・三・六・八・十が保留される。
- (27) 「偕王仲瞿孝廉蔣子野秀才遊洞庭東西兩山時吳県湯明府為治裝七首」各首の韻数について、其一是八韻、其二是十韻、其三是八韻、其四是九韻、其五是十韻、其六是十一韻、其七は十一韻である。『甌北集』卷十七を参照。